



イラスト／細井美風

2022年6月26日(日) 第20回定例総会



初めて参加させて頂いた定例総会でした。会場では生花が活けられていました。スタッフのおひとりがご自宅から持ってきて下さった花とのこと。そういった方々がたくさん繋がっている、えんらしさを感じました。

総会について。私自身が働くのは在宅介護現場で、悩むのも現場ですが、法人としてその現場をなんとか守らなければと奮闘し、コロナ禍中に少しでも安心して働けるようにと要望し続け、得られた無償のPCR検査やワクチン接種支援だったこと、改めて心強く感じました。また、デイサービスやグループホームなど普段は交流の機会が少なくなっていますが、それぞれの事業所のコロナ禍での思いを聞くことの出来た貴重な機会になりました。

総会後の福島あつしさんの講演会。福島さんが、この世界に関わり始めた初期の感情は生々しくリアルで、自分自身ともリンクするものがありました。でも、いつの頃からかレンズを通して見える景色が変わると、希望を与えてもらった温かい講演会でした。

(ケアサポートえん／和田真希)

～第 20 回定例総会の報告～

代表理事 小島美里

コロナ禍は第 7 波を迎え、介護現場はまたもや緊張の日々です。その上、異常気象、安倍元首相の銃撃による死、その後出てきた政権と旧統一教会との信じがたい癒着…。日本終わった！と叫びたくなるような事件が続きます。

さて第 20 回定例総会のご報告です。総会の準備はスタッフ総がかりで議案書を作成して臨みますが、ついに 100 ページになりました。当日は担当する部分をそれぞれの管理者が伝えます。傍聴された方から「皆さん自分の言葉で語っていられたね」と感想をいただきました。以下、総会の報告です。

2021 年度

まず決算は約 70 万円の黒字に。相談支援事務所棟新築の大きな出費があつてのプラス決算です。幸運にも事業所内でのクラスター感染を起こさず、コロナ禍との適切な付き合い方を模索しながら運営した各事業所の成果でした。しかし在宅介護従事者に対する扱いはあいかわらず酷く、国レベルではワクチン接種は一般枠、新座市に要望してようやく高齢者と同時期に。第6波で爆発的に感染者が増えると訪問介護が在宅感染者のサービスを継続しましたが、1 事業所総額数十万円程度の「かかり増し経費」のみ。介護施設は感染者 1 人 30 万円の補助、この差は「政治力」の差でしょうか。

大きな新規事業は、相談支援と基幹相談支援の事務所建築。コロナ禍での資材未入荷や高騰に悩まされながら、何とか年度内に完成。この建物、2 階部分に将来緊急避難にも利用できる居室を作っておきました。

歳月を感じる年度でした。ボランティア時代からの(約 30 年)一人暮らしの利用者さんが亡くなりました。若い時の病気でほぼベッド上の生活でしたが、料理番組でおぼえた調理法を伝えるなど生活を楽しむ姿勢に教えられました。また、かつて親御さんが利用された方、元スタッフが利用者になるケースも増えています。地域に着実に根付いていることを実感した年度でした。

2022 年度計画

暮らしネット・えんは 2003 年 4 月に事業開始しましたから、来年春 20 周年を迎えます。今年度は足跡を振り返り、地域に向けての発信力を強めることに力を入れます。さすがに法人設立より後から入ってきた職員が多くなり、もう一度介護 NPO えんのこれまでとこれからを考える機会にします。

また、2023 年に予定される介護保険改正は今年度内には介護保険部会での議論を終えてしまいます。利用料 2 割負担の標準化(今の倍!)、ケアプランの有料化等々、最悪と言われる改正案に現場からの声を届けて何とか阻止していかなければ、高齢者の生活が破壊されてしまいます。

そして、日常の賑わいが取り戻せるよう準備しつつ、感染対策を怠らず、コロナ禍の収束を待ちましょう。



イラスト／細井美風

～第20回定例総会に出席して～

職員の思いを吸い上げた総会議案書ができあがり、そして迎えた総会当日。冒頭の小島代表の挨拶では近々行われる介護保険改正に伴い、利用者さんやえんのような小～中規模の事業所が増々厳しい環境に置かれる可能性があるというお話がありました。えんのような小規模の事業所でも知恵を絞り工夫している所は、大規模な施設よりも利用者さんに合わせた介護を提供していると思います。それに事業所に戻れば、何でも相談に乗ってくれるベテラン職員がいて、とっても働きやすい職場です。

今年1月に特養老人ホームからえんの訪問介護部門に転職し、不安だらけの日々でしたが、周りの方々のサポートのおかげで少しずつですが、落ち着いてケアに入れるようになってきました。私が働いていた特養では1階から3階までで利用者さんが100人ほどおり、少ない職員でみなくてはいけないので、利用者さんに寄り添った介護がなかなかできないのが現状でした。えんに来て印象的だったのは職員同士がとても密にコミュニケーションをとって、利用者さんの要望にも柔軟に対応しているということです。その分ヘルパーの予定も日々めまぐるしく変わるし、利用者さんの心身の変化にも気を遣います。

「えん」という名前には「縁」「円」「苑」「園」といったいろんな意味が込められているそうです。利用者さんや職員を大切にしている職場が残って欲しいし、それを支える一員としてこれからも日々コツコツがんばりたいです。

(ケアサポートえん／小野実穂)

えんの歳月を詰め込んだ本を出しました！

7月、『あなたはどこで死にたいですか？～認知症でも自分らしく生きられる社会へ～』（岩波書店 定価：税込 2,310円）といういささか刺激的なタイトルの書籍を出しました。超高齢化が進み認知症になる人が増加する中、いざ介護サービスを受けるときまで、使い勝手が悪くなった介護保険の実情を知らない人がほとんどです。「安心して最期を迎えるために必要な制度とはどのようなものか」をご一緒に考えたいと著しました。そして、暮らしネット・えんの利用者さん、スタッフのおかげで書き上げられた本です。多くの方に読んでいただければ幸いです。

あなたはどこで 死にたいですか？



小島美里

認知症になったら、
必要な介護サービスを受けられる？
“在宅ひとり死”は、おすすめできない？

HNKモデル「暮ら-拠点」は、認知症、身体衰弱などで
生活の拠点を喪失し、世帯を離れし続けてきた
高齢者の世帯の状況による、高齢者の割合



「ぼくは独り暮らしの老人の家に弁当を運ぶ」を聞いて

写真家福島あつしさんの講演は、同様に弁当を届けている私にとり、興味深い内容でした。聞き終えた瞬間、血が踊る思いで拍手していました。「暗い」、「汚い」、「臭い」という印象がある独居老人宅へ福島さん自身が弁当を届ける傍ら、その生活のままの老人達を23歳から33歳迄の10年間写真を撮り続けました。38歳の時この写真集で受賞という荣誉に至るわけですが、その道程は平坦ではなかった様です。当初は撮る側と撮られる側との距離が埋まらず、型通りの映像で苦闘されたとの事でした。映像が劇的に変わり始めたのは30歳からとか。一人ひとりの表情が「自然で、ありのままに」「同じ目線で寄り添う姿」が見事に表現され、福島さんの「豊かな感性」が発揮されます。

今年41歳、旅する写真家福島あつしさんに熱いエールを送り続けたいと思います。

(えんの食卓／胡桃沢進)

福島さんは高齢者弁当の配達として、足かけ10年に渡り働いてきました。そしてプロの写真家でもあります。この写真集刊行にあたり、独居老人らに対しての福島さん自身の心の動きや葛藤を話してくださいました。

配食先の老人達の中には、すさまじく不衛生な中での生活や、においのある中でも、どうしようもなく暮らしている方もおり、福島さんはその現状にまず驚かされます。このような老人達をはたしてカメラに収めて良いのだろうか、そしてそれを世間に出しても良いのだろうか、悩みます。長い葛藤の後、今日一日を前向きに生きようとしている老人達に気づき、又、彼らに敬意を払っている自分に気づいた時、胸のつかえを下ろし、写真集を自分の目線で刊行することができたそうです。

ここ暮らしネット・えんでも同様のサービスを現在154人の単身老者を含む高齢者に行っています。配食担当は一人ひとりとしっかり目を合わせて会話をし、今日の健康を確認して弁当をお渡ししています。そこには平和があり、弁当という糧と同時に命がかよっています。このやさしい目線と受け入れようとする心は、えんで働くどの職員にも共通しているように思います。

この写真集を通してたくさんの方が何かを気づくきっかけになればと願います。

(えんの食卓／河野秋子)

えんの食卓は 10 年目！ ①

えんの食卓は、10年目を迎えます。現在、弁当の配食サービス、グループホーム、デイホーム、多機能ホームまどかの昼食、グループホームと多機能ホームまどか、グループリビングえんの森の夕食、合わせて1日平均120食の食事を作ります。

配食弁当は当初ほんの数件で1コースのみ、配達時間は1時間あれば帰って来られる件数でしたが、最近では日によって3~4コース、配達時間は2時間近くかかります。今回は、立ち上げ当初からいるスタッフが10年目を迎えるにあたり感想を書きました。

🍴 2012年の夏の終わりに、「新座で配食事業を始める所が、栄養士を探しているけど行ってみない？」と知人に声をかけられました。11月からGHの食事作りのスタッフとなり、年末から配食事業の話し合いが始まり、年明けから厨房の工事が開始すると共に、他事業所へ見学に行ったり、厨房の道具をそろえたり、マニュアルを作ったりと、スタッフで話し合いを重ね準備が整い始め、4月には厨房でグループリビングえんの森、グループホームえん、デイホームえん、多機能ホームまどかの食事を作りながら厨房に慣れていき、いよいよ5月1日から『えんの食卓』として配食事業がスタートしました。初日の利用者は1名からのスタートで、半月ほどは試食を含め5食程度でしたが、5月の終わりには利用者さんは15名になりました。利用者さんにお弁当の感想を聞きながら改善を重ね、試行錯誤しながら竹内恭子先生（元埼玉医科大学栄養部長）や十文字学園女子大学食物栄養学科の協力を得て、スタッフみんなで協力しながらなんとか軌道にのってきました。10年を迎えるこの頃、スタート時の目標であった1日80食を達成することができています。10年前からずっと利用し続けてくださる方もいて、みなさんにおいしいと言ってもらえ、本当にありがたい事です。これから先も皆さまに喜ばれる食事であり続けられる様、努力していきたいと思えます。

(菊池君江)

🍴 十年を迎え、利用者総数110件以上となり、100才を超える超高齢者を始め、寝たきり、認知症、独居、高齢夫婦世帯など「超高齢社会」を象徴する方々が大多数を占めます。配達時は利用者の方に接する一瞬に、目、顔、体、声などに集中して見守りしていきたいと心がけています。

(田島邦城)

母を見送った季節に思うこと



今から3年前の4月。新卒で就職してちょうど1年が経った頃、私は介護休業をいただいて実家へ帰りました。末期ガンと診断された母と、最期の時間を自宅で一緒に過ごすためです。仕事柄長期休みを取ることが出来ない兄から託された想いも胸に、娘として、介護に携わる者として、自分なりに出来ることを精一杯頑張ろうと決めました。

一足先に介護休業へ入っていた父とご飯作りを手伝う祖母、時間を見つけては会いに来てくれる兄。家族5人と、往診医や訪問看護師、訪問入浴サービスの方々、その他母の親戚や友人等、様々な人が関わってくれる中、最期の2ヶ月は過ぎていきました。

時間が経つごとに、母の病状は悪くなっていきました。痛み止めの薬の量が増え、訪問看護の頻度も増えました。同時に私自身苦しむ母を見ているのが辛く、無力感や自責の念、様々な不安から精神的に苦しくなってしまうことが多々ありました。そんな時、医師や訪問看護師等の専門家にいつでも相談できる環境にあったこと、いつも変わらず丁寧な入浴やケアをする方々が近くにいてくれたこと、そして専門的・非専門的を問わず様々な視点から客観的な意見をくれる周囲の人たちがいてくれたことに、とても安心を感じたことをよく覚えています。

また後日父と話をした際に聞いたのですが、当時訪問看護師さんは理学療法士である父に「専門職としてではなく、家族として側にいてあげてください」という言葉をかけてくれたのだそうです。大切な人の死を目の前にして、感情の動きや揺らぎが生まれることはごく自然なことだと思います。それを無理に抑え込まずに皆で向き合い、心を寄り添わせながら大切な時間を過ごす。それは家族であるからこそ出来る役割なのではないか。今になるとそう思います。そして本人や家族が抱えるいろいろな思いや感情と少しでも向き合いやすくなれるように、専門の技術や知識を使い本人の身体や周囲の環境を整えていくことが、看取りの場面における専門職としての役割なのかもしれないと考えるようになりました。

仕事へ復帰後、終末期に入った利用者さんに対しては、そんな役割を特に意識しながら関わるようにしています。まだまだ未熟者ですが、看取りにおける併走者として安心と信頼をよせてもらえる存在となっていければと思います。

「伝えたい まどかのこと」 ～通いサービス編～

本来、小規模多機能型居宅介護はデイサービス（通所介護）と違うため“通所”という単語を用いません。デイサービスのように違う、それが小規模多機能型居宅介護「多機能ホームまどか」の良さでもあります。



必要に応じて行ったり来たり

ある日の朝、まどかからケアサポートえん（訪問介護）に異動したスタッフから「Sさんが雨の中ビショビショになって小学校の近くを歩いているよ」と連絡があり、すぐ迎えに行きました。

“Sさん！”と声をかけると、泣きそうな表情で「アッ！知ってる！知ってる人だ！」と走ってきました。Sさんは大雨の中、壊れたビニール傘といつもの手提げを持ってまどかを目指したようです。車に乗ると「ゴメンネ、ゴメンネ、わかんなくなっちゃった。よかった、知ってる人で」と涙を流していました。一緒に自宅に戻って濡れた服を着替えてから、まどかの通いサービスに。いつもと違うことがあった朝だけど、自宅と行ったり来たりした朝だけど・・・、そのあとは安心した表情で過ごされました。

利用者さんに合わせて

通いの日の朝、いつもは妻がHさんを送り出して下さいますが、この日は出てこられず、「お願いします」と奥から声が聞こえ、お部屋に入らせていただきました。Hさんはベッドに横になって、目覚めてはいるけど起きられない様子。

「Hさん、まどかです。おむかえにきました」と声を掛けますが、一点を見つめて瞬きばかりで返事もなく、起きる様子もありません。妻と相談して、1時間後に伺うことにしました。

再び伺うと、ご近所さんが見守っていて、「ご苦労様」と声をかけてくださいます。Hさんはベッドに座っていたので、声を掛けるとニコリとして立ち上がり歩き出しました。そして、一緒にまどかに向かいました。

Hさんは、まどかにいる時も、声掛けで動ける時とそうでない時、そして何か作業されている時があります。特に作業に夢中な時は、なかなか他の行動に移るのが難しいようです。帰る時間が伸びることもあります。ちょっとしたきっかけで行動できることもあります。

どんな時でも、できるかぎり本人の気持ちや体調に合わせて対応できるのが小規模多機能居宅介護です。

● 写真展のお知らせ ●

『ぼくは独り暮らしの老人の家に弁当を運ぶ』

2022年10月16日(日)～23日(日) 月曜休館



新座市立中央公民館ロビーにて



NHKETVなどで紹介された福島あつしさんの写真展です。代表小島美里の書籍『あなたはどこで死にたいですか』(岩波書店)の表紙(P3)に使わせていただきました。

◆ 認知症電話相談のお知らせ ◆

認知症に関する悩みごと、介護のコツや生活の工夫等々、お気軽にお電話ください。

TEL 048-480-4150

～今後の地域交流事業について～

認知症カフェは参加者を限定して開催
(お問い合わせください)
だれでも食堂にいざはお休みさせていただきます。

～新型コロナウイルス対策～

第7波の新型コロナウイルス
感染防止対策につとめてまいります。



職員大募集！！

離職率が低いと評判の暮らしネット・えんで一緒に働いてみませんか？

ヘルパー(訪問介護職員)・介護職員・送迎運転担当者募集しています。

資格がない方も資格取得のお手伝いをいたしますので、ご相談ください。

地域で暮らし続けていくために 2022年度新規・継続会員募集中！

正会員：1000円 賛助会員：3000円

※入会を希望される方は、事務局までご連絡ください。

郵便振替(00180-5-314344)



■ 編集・発行 認定NPO法人暮らしネット・えん

〒352-0033 埼玉県新座市石神2-1-4

電話:048-480-4150 FAX:048-201-1311

Eメール:npoenn@jcom.home.ne.jp

ホームページ:https://npoenn.com/